

野辺地湊（野辺地港・野辺地漁港）の
「みなと文化」

石山 晃子

目 次

第1章 野辺地湊の整備と利用の沿革.....	4-1
1. 古代～中世	4-1
2. 近世	4-1
3. 近現代	4-2
第2章 「みなと文化」の要素別概要.....	4-4
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」 ..	4-4
(1) 芸能	4-4
(2) 言語	4-5
(3) 信仰	4-5
(4) 食べ物	4-6
(5) 人物	4-7
2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」	4-7
(1) 物資の流通を担う産業	4-7
(2) 交易物資の保管施設	4-8
(3) 行政施設	4-8
3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」	4-8
(1) 港湾利用産業	4-8
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」	4-9
(1) 遊里	4-9
(2) 文芸	4-9
(3) 祭り	4-10
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」	4-11
(1) 港・海運に関する歴史的施設	4-11
(2) 港町の町並み	4-11
(3) 港の景色	4-12
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き.....	4-13
〔参考文献〕	4-14
〔HP関係図版等出所〕	4-14

所在地：青森県野辺地町	港の種類：港湾・漁港	港格：地方港湾・第二種漁港
-------------	------------	---------------



【位置図】



【現況写真】

(国土交通省東北地方整備局港湾空港部 HP)

第1章 野辺地湊の整備と利用の沿革

1. 古代～中世

野辺地港は陸奥湾の支湾、野辺地湾の湾奥、野辺地川河口付近に位置する。「野辺地」の地名の由来は、アイヌ語の「ヌップペツ」（野を流れる川）によるといわれる。

古代における利用は明らかではないが、すでに中世末期からの交易港であったと考えられている。

文禄2年（1593）5月27日の南部信直書状によると、信直が、野辺地・横浜で「ゑそふね」を造り、仙北（秋田県仙北郡）の米を野辺地へ回漕することを命じている（「遠野南部家文書」）。戦国末期、野辺地は北国海運によって上方と結びつく港として利用されていたと考えられる。

2. 近世

盛岡藩が江戸幕府に提出した正保4年（1647）の南部領内総絵図（盛岡市中央公民館蔵）に「野辺地浦」とあり、「此所二丁沖ニテ深老丈、船懸自由」とされている。また、松前城下前、下北半島九艘泊、津軽領外濱までへの航程が記されている。

宝永年間頃までが野辺地湊の興隆期とされ、陸奥湾に面した野辺地湊は、近世、盛岡藩の商港として、津軽や松前、日本海海運と結びつき、飛躍的に発展していくこととなる。

野辺地湊からの重要な移出品は、「御登銅（おのぼせどう、御用銅ともいう）」「御登大豆（おのぼせだいず）」であった。御登銅は当初おもに能代湊から積出されていたが、明和2年（1765）に尾去沢銅山が藩直営となると、野辺地湊が利用されるようになった。この「御登銅」と「御登大豆」の積出しにより、野辺地湊は本格的に発展することとなる。

御登大豆とは二戸以北の南部地方で生産される大豆で、大豆蔵に納められた後、大坂へ積み出された。御登銅とは近世後期に入り鹿角地方の尾去沢銅山から産出された銅である。野辺地から大坂へ廻漕され、幕府の銅座でさらに棹銅に精錬されて長崎へと廻漕、長崎か

ら国外へ輸出された。江戸初期には野辺地から東廻海運で江戸へ運ばれたが、後期にはおもに西廻りで運ばれるようになった。

銅や大豆のほかに、長崎俵物としての「煎海鼠（いりこ）」や、海産物・材木なども多く積み出された。

野辺地湊は、城米や蔵米、御用銅などを廻漕する賃積船のほか、諸港で商売の売買を行なう買積船として西廻海運で活躍した北前船の寄港地として大いに賑わった。

野辺地湊の廻船問屋五十嵐家の「久星客船帳」によると、寛政2年(1790)から明治3年(1870)までに扱った廻船は254艘で、特に大坂・越前・加賀・松前の廻船が多く入港している。

湊の繁栄は上方文化の流入と豪商の台頭を促し、湊町は活況を呈した。



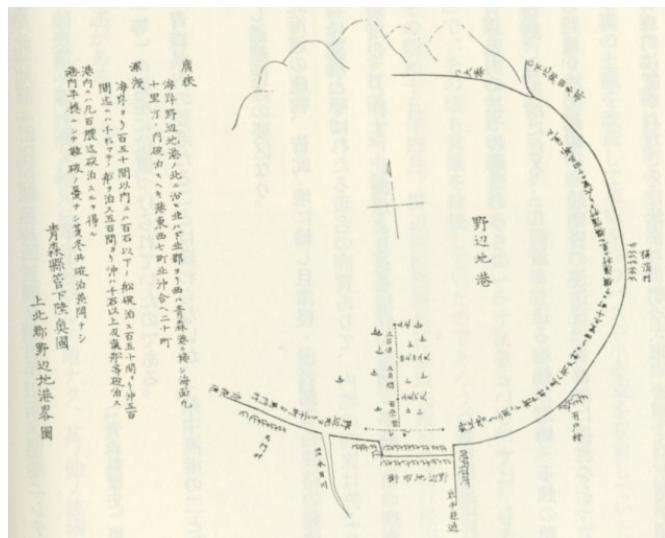
【幕末の野辺地湊】
(青森県野辺地町 HP より)

3. 近現代

「新撰陸奥国誌」によると、明治初年の野辺地には、北海道の産物がすべて運ばれ、津軽と田名部の岐路であることから繁栄を極め、中国・大阪方面からの商船が日夜往来し、県内第二の湊といわれたという。野辺地港は帆船の入港には都合が良かったものの、遠浅のために、大型船は沖に碇泊することとなり、旅客や荷物は舢舨で運搬した。大型蒸気船の発達にともない、野辺地港は不利な条件を負うこととなった。

野辺地港は北海道への出稼ぎ漁夫の集散地としても賑わった。大正初期の頃は、三陸沿岸や北浜（岩手県、八戸の太平洋沿岸から三沢・泊一帯）にかけての漁村から、多くの出稼ぎ者が野辺地港から北海道へ渡航した。

東北本線（明治24年）と奥羽本線（明治35年）の開通により、青森が物資の集散地として大きな位置を占めるようになる一方で、野辺地は通過駅に過ぎなくなり、港としての不便さから、野辺地港への物資の集積も次第に減少していくこととなった。



【野辺地港略図】
(『野辺地町史 通説編 第二巻』より)



【野辺地棧橋】
（『野辺地町史 通説編 第二巻』より）

戦時中、野辺地港は青森港の石炭揚陸補助港として改修、利用されたが、昭和 22 年（1947）に国の商港指定を受け、防波堤 50m の改修工事に着手した。昭和 28 年（1953）に地方港湾に指定された。

野辺地漁港については、昭和 7 年、当時の漁業組合が 90m の船揚場、翌 8 年には 49m の木造棧橋を建設し、わずかに漁港としての機能を保っていたが、昭和 29 年 9 月の台風により大破した。漁港施設の不備が漁業生産活動の支障となっていたが、昭和 26 年に第 1 種漁港として指定された。

昭和 30 年後半からの高度経済成長により自動車が増加し、本州と北海道を結ぶ自動車航送基地として野辺地港が注目され、昭和 44 年（1969）には、野辺地～函館間に東日本フェリーが就航した。

現在では、常夜燈を中心とした公園が整備され、湊関係施設跡地には標柱が設置されるなど、在りし日の野辺地湊の面影を残している。



【蔵町跡標柱】（筆者撮影）

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

(1) 芸能

① 沖揚げ音頭

本体は仕事歌であるが、現在では民謡として知られるソーラン節の元になったといわれる沖揚げ音頭が野辺地に伝わる。獲った鯨を船から運搬用の船に移すときに歌った、網おこしの歌で、北海道での鯨漁帰りの出稼ぎ者が、野辺地に戻ったときに歌い始めたという。

鯨漁が不振となり、次第に歌う人が少なくなったものの、沖揚げ音頭は、のへじ祇園まつりの山車の先導で歌われるほか、町内の馬門小学校の児童が伝承するなどしてきた。しかし、途絶えつつあることから、平成20年5月、当時の鯨漁の様子や沖揚げ音頭を後世に伝えるために、ニシン場へ出かけた人たちが中心となり、野辺地町沖揚音頭保存会が結成された。最近では、鯨漁やソーラン節にゆかりのある北海道積丹町や利尻町などのイベントに参加するなど、交流を深めている。

(音) ヨートコセノーコリヤー
 (多勢) ヨーイ
 (音) ヨーイヤーサー
 (囃子) アーヨイヤー
 ヤサノーヨーイサー
 エーノーヤーサー
 ヨートコナー
 アーリヤーエンヤーアリヤリヤー
 ドッコイ ヨーイトーコー
 ヨーイトー コーナ
 ヨーリャエー
 ヤートコセ
 ワーラーノ山に一居たー
 アーヨイトコーナー
 アーリャエンヤ アリヤリヤー
 ドッコイヨートイ ヨーヨイトコーナー
 アーラーエー沖の鷗がヤーエー
 ヤートコセー ヨーイヤサー
 ワーリャもの言うならばあ
 ヨーイトコーナ
 ワーリャエンヤー
 ドッコイヨイト コーヨイトコーナ
 オーリャエー便り聞いたりーヨーイー
 ヤートコセーヨーイヤー

オーリヤーエー聞かせたりょう
 ヨーイトナー
 アーリヤ エンヤ アーリヤ ドッコイ
 ヨーイトナー コーヨーイトコナ
 オーリヤエ 水が鏡と ヤーエ
 ヤートコセ

(『青森県の民謡』より)

(2) 言語

青森県の方言は南部方言、津軽方言、下北方言の三つに分けられる。野辺地の方言は、基本的には南部方言であるが、上方なまりで、おっとりとしたやさしい口調が特徴的であるといわれる。

(3) 信仰

①水神宮

水神宮は浜町全体の氏神として信仰があり、参道階段の脇には清水が湧いている。この水神宮は、江戸後期の廻船業者で蝦夷地交易に活躍した高田屋嘉兵衛（1769-1827）が、野辺地の五十嵐彦兵衛の世話により、文化年間に勧請したという伝承が残されている。

「野辺地町郷土史資料 中巻」によれば、当時、海岸には合船場があり、船材は現在の水神宮の下の池で湿したものだ。彦兵衛は嘉兵衛の船の合船を請負、工事を進めたが、あまり池の水を使ったために、遂に水が涸れてしまった。ある夜、水神が嘉兵衛の枕元に立ったので、嘉兵衛は社堂を建立して水神を祀ったが、これが今の水神宮であるという。

この清水は、北前船の船乗りたちの飲料水などに利用され、重要な水であったという。



【水神宮】（筆者撮影）

②野辺地八幡宮

野辺地八幡宮は、慶長年間（1596～1614）の創建と伝えられる。港町として発展した野辺地町の歴史を象徴する建造物である。氏神、漁業の神、海上安全の神として信仰されてきた。

- ・本殿（県重宝）・・・正徳4年（1714）に再建。
- ・末社 金刀比羅宮本殿（県重宝）・・・文政5年（1822）に野辺地の廻船問屋 仙台屋彦兵衛らによって勧進寄進されたもの。



【野辺地八幡宮末社金刀比羅宮本殿（県重宝）】
（青森県野辺地町 HP より）

（4）食べ物

①茶がゆ

野辺地の商業地域において、朝食に茶がゆが食べられた。文化・文政期（1804～1829）に北前船で上方から伝えられたとされる。この茶がゆは「カワラケツメイ」という草茶を乾燥させ、さらに炒ったものを使用して作る。

現在では、カワラケツメイ茶のアイスクリームや茶がゆの加工品などが販売されている。



【茶がゆ】
（青森県野辺地町 HP より）

②けいらん

上方文化の伝承による伝統料理で、東北や北海道南部にもたらされ、初めはダンナ衆と呼ばれた商人などに受け入れられたという。鶏の卵のように丸めた餡入り団子を細麺の上へのせ、出し汁を張って鳥の巣ごもりに見立てたもので、本来は精進料理でもある。

現在は不祝儀ばかりでなく、紅白に作って結婚式に出されるなど、野辺地の食文化の一つとして受け継がれている。

（５）人物

①豪商「野村治三郎」（屋号：立鼓一）

野村治三郎は、江戸後期以後の野辺地の豪商で、代々「治三郎」を襲名し、屋号を立鼓一（りゅうごいち）といった。

５代（1800～1843）は盛岡藩の御用銅、御登大豆の取扱い支配人をつとめ、廻漕業を営んだ。文政10年（1827）には施主として常夜燈を建立した。藩に多額の御用金を納め、苗字帯刀を許されるなど、その興隆ぶりは天保6年（1835）「御国中分限番付」の関脇にあげられるほどであった。

８代（1876～1949）は、畜産、漁業振興などに尽力、明治32年（1899）には合資会社野村銀行を創立して、頭取となり、地方金融、産業界の中心となった。大正4年（1915）には衆議院議員に当選し、政界でも活躍した。

②豪商「野坂勘左衛門」（商号：山一）

初代は元禄元年（1688）没。江戸時代、野辺地湊の最盛期には、酒造業や呉服商などを営み、御用銅の支配人もつとめた。千石船を4艘で交易を行い、200年にわたって繁盛した。

③豪商「野坂与治兵衛」（商号：鱗丸）

初代は天和3年（1783）没。盛岡藩の御用銅、御登大豆などの支配人をつとめ、海産物の取扱いや、味噌、醤油の醸造業を営んだ。持ち船の泰運丸、泰安丸などで松前方面との取引も行なった。

④豪商と蝦夷錦

中世から近世にかけて、北海道や樺太を結ぶ山丹交易によってアイヌ民族に渡り、松前藩を経て、さらに日本各地へと運ばれたのが中国製の絹織物「蝦夷錦」である。近年、野辺地町内の商家から、袱紗に仕立てられた二点の蝦夷錦が発見され、当時の北方世界の海運による結びつきを示す貴重な資料となっている。

２． 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

（１）物資の流通を担う産業

①御雇船と地雇船

江戸時代、御用銅や御登大豆廻漕のため、藩と大坂廻漕問屋との間で契約され、大坂で雇用されて野辺地湊に差し向けられた船を御雇船と称した。積出しが予定を上回った場合は、地雇船によることが多かった。航海所要日数は下りが24～45日、上りが66～120日で、御雇船は銅・大豆・海産物を合わせ積んだ。

②陸奥湾周航

明治24年（1891）には東北本線が全通したが、野辺地と下北方面を結ぶ大湊線の全通は大正10年（1921）であった。下北半島に通う航路開発と汽船会社設立の動きが次第に活発化し、明治30年（1879）11月、下北と野辺地町の有志により、陸奥汽船合資会社が組織された。汽船福栄丸（60トン）を購入し、明治31年2月から大湊（むつ市）を起点に、野辺地・青森間を一日おきに運航した。

また、明治41年（1908）5月からは、大湊～川内～脇野沢～青森～野辺地～横浜間の定期運航と函館の航路が完成し、「陸奥湾丸」「東北丸」「南部丸」が活躍した。

しかし、大正 10 年に大湊線が全通すると輸送の主流は鉄道に移り、翌年陸奥湾汽船会社は解散となった。

（２）交易物資の保管施設

①銅蔵、大豆蔵

海岸沿いには、盛岡藩の銅蔵や大豆蔵が立ち並んでいた。現在、その跡地には「蔵町」の標柱が設置されている。

（３）行政施設

①船遠見番所（見張番所）

異国船監視のために設けられた。正保 4 年（1647）の南部領内総絵図（盛岡市中央公民館蔵）に「船遠見番所」が記載されている。

現在、その跡地には「遠見番所跡」の標柱が設置されている。



【遠見番所跡標柱】（筆者撮影）

3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

（１）港湾利用産業

①御登銅の積出し

明和 2 年（1765）、盛岡藩は尾去沢鉦山（秋田県）を直営とし、生産された銅は翌年から御用銅（南部銅とも）として、野辺地湊から大坂に積出しされた。

御用銅とは、幕府が長崎貿易で輸出した銅のことで、幕府から廻漕を命じられた南部領の御用銅は、上方・江戸方面からは「南部銅」と呼ばれた。また、輸送中の領内取次問屋や役人からは、「御登銅」と呼ばれ、厳重に取り扱われた。

尾去沢銅は野辺地までの三十余里を、牛で通して運ぶ「通し牛」と「宿駅継ぎ」により駄送され、木札をつけて御雇船に積み込まれ、大坂へ廻漕された。大坂で「棹銅」に精錬された後、長崎へと廻漕された。8 月以降に野辺地に到着した銅は、「困銅」として翌年運ぶために御用銅蔵で保管された。

②御登大豆の積出し

盛岡藩の移出品として大坂へ輸送された大豆を御登大豆（三都御仕向大豆とも）という。福岡通、三戸通、二戸通、五戸通、七戸通、野辺地通の各代官所管内から藩により強制買い上げされ、大豆蔵に納められた後、野辺地湊から御雇船に積み込まれて西廻り航路で輸送された。御用銅の大坂廻漕が始まる明和 2 年（1765）以降、盛んだったとされる。

③海産物の積出し

江戸時代、横浜沖を中心に獲られたナマコは、対中国貿易における重要な輸出品である「長崎俵物」のひとつ、「煎海鼠」（干しナマコ）として積み出された。

野辺地湊の仙台屋が俵物支配問屋となり、野辺地近隣の八か浦から集荷した俵物が仙台屋に一旦集荷され、田名部の支配問屋へ陸送された。大平（現むつ市）で船積みされて、長崎へ廻漕された。

また、全国的に木綿の普及に伴い、栽培のための肥料が必要とされたのに対応し、御用銅の運送で大坂商人からの借金があった盛岡藩では、この埋め合わせのために、領内の魚ノ粕を買い上げて野辺地湊へ集荷し、大坂へ移出した。

④野辺地醤油

「新撰陸奥国誌」によると、明治初年の野辺地の土産物として、醤油・サメ・煎海鼠が挙げられ、とくに醤油は「野辺地醤油」と称して、北海道や諸国に移出したという。

⑤「ホタテの町」野辺地

野辺地湾では、江戸時代から天然もののホタテが生息したとされ、ホタテ漁が行なわれていた。昭和初年には、海底に三尺位の厚さでホタテ貝の層をなしているといわれたほど、大漁であったという。しかし、天然ものは収穫量が不安定であることから、ホタテの養殖が盛んに行なわれるようになり、昭和40年代終わり頃からは2,000トン～4,000トンと安定的に収穫できるようになった。

現在もホタテの増養殖が盛んで、平成19年には、野辺地町特産である「ぢまきほたて」が商標登録された。

4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

(1) 遊里

①遊女場

松浦武四郎「東奥沿海日誌」(嘉永3年)に、「町の入口より左海岸に至りて、浜町といふて遊女場有り」とあり、船乗りや旅人など多くの人々で賑わったと考えられる。

(2) 文芸

①最上徳内

山形県村山市楯岡出身で、蝦夷地を探検した最上徳内は、天明7年(1787)、2回目の蝦夷地行きを松前藩に断られ、野辺地に留まることになった。寛政元年(1789)までの2年間、船頭新七の家で、算術や読み書きを教え、廻船問屋島屋清吉の妹ふでを妻とした。

②古川古松軒

天明8年(1788)、幕府巡見史に随行した古川古松軒が野辺地を通過し、「野辺地は三百余軒の大概の町なり」(「東遊雑記」)と記している。

③松浦武四郎

幕末の旅行家で、数度にわたり南部、津軽を訪れた松浦武四郎は、嘉永3年(1850)に執筆した「東奥沿海日誌」において、野辺地の繁栄振りを次のように記している。

野邊地 青森より十壺里。馬形より二十丁。此処浜形北向。此湾の奥の詰にして波浪甚穩也。海岸浅くして湊と云にはあらざれ共、北国廻りの船運送宜敷処にして皆此処へ着す故に、国中の産物鹿角、一之戸、福岡を初として三ノ戸、五ノ戸、七ノ戸、皆此処にて積出す。其風は津軽の米の印撰よりも又甚し。(中略)

人家五百軒斗。当領半ハ此処にて諸事運送致故に市中甚富り。また町の入口より左

り海岸に至りて、浜町といふて遊女場有り。人家三十軒斗なり。(後略)

(『東奥沿海日誌』時事新書 昭和44年)

④野辺地を往来した人々

江戸時代、野辺地は奥州街道を北上してくると、下北方面と津軽方面との追分にあたる地であるとともに、蝦夷地への航路も開かれていた。旅人が蝦夷地渡航のために、野辺地湊を利用し、蝦夷地からも野辺地湊へ入港するなど、多くの人々が往来し、宿場町として賑わった。

松浦武四郎や古川古松軒のほか、菅江真澄、伊能忠敬、橘南谿、高山彦九郎、遠山景晋、頼三樹三郎、吉田松陰など、数多くの文人墨客、幕府の役人、諸藩の藩士などが野辺地を通過したり、宿泊したりしている。

⑤俳人落柿舎重厚

寛政元年(1789)に野辺地を訪れた俳人落柿舎重厚が、野辺地湊の繁栄振りを「入船や帆柱ならぶ奥の秋」と詠んだ。

⑥俳諧の興隆

野辺地湊の繁栄にともなった商人層の富裕化により、俳諧が盛んとなった。文政元年(1818)、盛岡の小野素郷の句集「柴ノ戸」に野辺地の俳人が数人出句し、文政12年(1829)東奥野辺地社中が結社され、町内の愛宕公園に、松尾芭蕉の句碑を建てた。この「花ざかり山は日ごろの朝ぼらけ」の句は、芭蕉が貞享5年(1688)に桜の名所吉野山で詠んだものである。

江戸時代に始まった俳諧の伝統は明治期にも引き継がれ、明治33年(1900)には俳句の結社「笹鳴会」が結成され、明治36年(1903)には県内初の俳句同人誌である「菅菰」を発行した。中村泰山・中市絶壁らが県内俳壇の指導的地位にあった。

⑦石川啄木と野辺地

叔父の葛原対月が常光寺住職で、父の石川一禎も一時身を寄せていたこともあり、石川啄木は三度野辺地を訪れている。

昭和37年(1962)には、「潮かをる北の浜辺の 砂山のかの浜薔薇よ 今年も咲けるや」という啄木の歌碑が愛宕公園に建てられた。

(3) 祭り

①のへじ祇園まつり

のへじ祇園まつりは、もともとは野辺地八幡宮の例祭として、旧暦8月14日の宵宮から17日まで行われていたが、昭和40年代から「のへじ観光祇園まつり」という名称になり、町と観光協会・商工会となった。

八幡宮の神輿・船山車・神楽・各町内の山車が行列になって町内



【のへじ祇園まつり】
(野辺地町観光協会より提供)

を練り歩き、囃子は京都の祇園囃子の流れをくむといわれる。艶やかに着飾った稚児たちが優雅な祇園囃子を奏で、豪華絢爛なくつもの山車が町内を練り歩く。お囃子の旋律が京都の祇園祭のものに似ているのは、野辺地湊が盛岡藩の商港として栄えた時代に移入した上方文化の一つと考えられている。

現在、まつりは、8月中旬の4日間開催され、初日は長さ11m、重さ1.5トンの大しめ縄が野辺地八幡宮に奉納され、2日目からは山車運行や大漁旗を掲げた多数の漁船による海上渡御が行なわれる。

5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

(1) 港・海運に関する歴史的施設

① 浜町の常夜燈（野辺地町指定史跡）

野辺地湊として早くから開けた浜町には、かつての常夜燈が現存する。当時、夜間入港する船への目印として、旧暦3月10日から10月10日までの間、毎晩火が灯されていたといわれる。野辺地湊の豪商であった野村治三郎が施主となり、関西の船主橋屋吉五郎が世話人となって、常夜燈の運送にあたったものである。

文化10年（1827）の銘があり、現存する日本最古の灯台である。現在は公園として整備され、その歴史と当時の面影を伝えている。



【浜町の常夜燈】（筆者撮影）



【常夜燈公園】（筆者撮影）

(2) 港町の町並み

① 本町

現在の国道279号線の一部を構成する本町通りには豪商が軒を並べていた。道筋の中央には、昭和10年（1935）頃まで御影石が二列に敷かれていたという。この石は、御登銅や御登大豆の輸送のため、悪路を見かねた六代目野村治三郎が、自費で三千本の御影石を取り寄せて敷きつめたと伝えられる。

② 蔵町

盛岡藩の銅蔵や大豆蔵、野辺地の商人の土蔵や板蔵があったことから蔵町と呼ばれる。現在、跡地には標柱が設置されている。

③ 浜町

海岸沿いに開けた町で、江戸時代、町内には遠見番所、常夜燈、遊女場もあり、多くの人々で賑わっていた。文政 10 年（1827）に建てられた常夜燈が現存している。



【浜町（大正初期）】
（『野辺地町史 通説編 第二巻』より）

（3）港の景色

①愛宕公園

野辺地町内の中心である本町の東、上袋町の東方にある愛宕公園は、市中が眼下に見られる景勝地である。公園内には、明治天皇御乗馬花鳥号の銅像、文化 12 年（1815）建立の芭蕉句碑（野辺地町指定有形文化財）、昭和 37 年（1962）建立の石川啄木歌碑、昭和 47 年（1972）建立の中市絶壁句碑・忠魂碑、愛宕神社がある。



【愛宕公園】（筆者撮影）

第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

野辺地漁港を埋め立てて整備する「常夜燈公園」の工事は、2001年度から進められ、平成19年6月22日にオープニングセレモニーが行なわれた。常夜燈も公園内の一画に移設、常夜燈や野辺地湊の歴史に関する説明板も設置され、その普及に供している。公園内には遊歩道、東屋、遊具なども整備され、町民の憩いの場としても大いに利用されている。

日本で現存する最古の灯台「浜町の常夜燈」に代表される多くのみなと文化を大いに活用した、さらなる観光資源の開発の余地があると思われる。北前船の寄港地として、野辺地湊は全国的にも知られているので、その資源をさらに普及・活用し、地域の活性化につなげていくことが期待される。

〔参考文献〕

- 『青森県史 資料編 近世1』(青森県 2001)
『青森県の地名』(平凡社 1982)
『角川日本地名大辞典2 青森県』(角川書店 1985)
『青森県人名大事典』(東奥日報社 1969)
『青森県百科事典』(東奥日報社 1981)
『青森県「歴史の道」調査報告書 奥州街道(1)』(青森県教育委員会 1986)
『野辺地町史 通説編 第2巻』(野辺地町 1997)
『みちのく双書第18集 新撰陸奥国誌』(青森県文化財保護協会 1965)
『のへじまち 観光・史跡ガイドマップ』(野辺地町観光協会 2010)
萌出忠男著『野辺地雑記』(1979)
萌出忠男著『続野辺地雑記』(1981)
『野辺地の社会と民俗—野辺地の事例—』(北海道みんぞく文化研究会 1990)
『青森県の民謡—昭和61・62年度 民謡緊急調査報告書』(青森県教育委員会 1988)
『青森県山車祭礼調査報告書』(青森県立郷土館 2003)
『青森県漁港の40年』(青森県漁港協会 1991)
川村慎一著『古のロマンあふるる郷愁のふるさと 野邊地』(1997)
『歴史の息吹—新しい歴史交流を求めて—』(野辺地町教育委員会 1999)
四戸俊一著『野辺地往来記』(1987)
「広報のへじ」平成19年8月1日 第580号 (青森県野辺地町役場企画課)
「広報のへじ」平成22年7月1日 第615号 (青森県野辺地町役場総務課)

〔HP関係図版等出所〕

P.4-2 【幕末の野辺地湊】

<http://www.town.noheji.aomori.jp/category/189/189.html?section=25>

P.4-6 【野辺地八幡宮末社金刀比羅宮本殿 (県重宝)】

<http://www.town.noheji.aomori.jp/category/185/185.html?section=25>

P.4-6 【茶がゆ】

<http://www.town.noheji.aomori.jp/category/195/195.html?section=9>